ハンドテスト・シンポジウム 2021（第 40 回心理臨床学会自主シンポジウム 88）盛会におわりました。

ご参加いただいた皆様，ありがとうございました。予想以上に多くの方に参加頂き，事務局一同大変喜んでいます。また，シンポジウム・アンケートにもご回答いただきました。ご質問・ご意見の一部ですが，こちらに掲載させて頂くことで，お礼とさせていただきます。本当にありがとうございました。今後もハンドテストを通した臨床実践の研鑽の場として，本研究会が機能していけますよう，どうぞ，よろしくお願い致します。

ご質問・ご意見	回答
シンポジウムの後半山上先生のおっしゃる，ハンドテストのもつ「やりとりをして話が広がる，生き生きと相手の様子が伝わる」感覚は確かに重要に感じております。臨床での主要アセスメントツールは MMPI，ロールシャッハテストですが，患者さんに時間がない，疲労感強い，などの事情がある際には，特にロールシャッハテストが困難になります（自分にゆとりもないと検査後のスコアリングも手間がかかるので避けがちです）。わずかな時間にも，患者さんの「いきいきとした」様子をうかがうには，ハンドテストに助けられています。なので，結構 MMPI と併用するバッテリーを多く経験します。 そこで質問が，質問紙の性格検査で現れる要素と，ハンドテストは相関するのでしょうか？それともロールシャッハのように近似の概念でも（例えば「依存」）必ずしも相関しないで，異なる人格の層を反映しがち，なのでしょうか？	質問紙は，その人が，自分のことをどう認識しているかを捉えるものだと考えています。その認識と，ハンドテストが捉えている行動傾向，外界（他者）との関係の仕方が一致していれば，おそらく相関しているはずです。ハンドテストは，外顕的行動傾向を捉えるため，実際に観察可能なその人の行動特徴がハンドテストに表れます。そのため，身近な人にとっては，その人らしい反応だと感じるのではないでしょうか。しかし，その行動傾向を本人が認識していなければ，質問紙にはその傾向は反映されないのだろうと思います（佐々木）。 質問紙に答えるためには、質問そのものを理解する知的能力と、自分を対象化して観察する自我力を必要とします。一方ハンドテストの教示は子どもでも分かり易しいものです。また、自己を客観視できない人でもハンドテストには反応できる事が多いです。したがって、質問紙には答えられなくても、ハンドテストにその人らしさが反映される時こそ、ハンドテストの有用性があるとも言えます。ただ反映される人格の層は、FS 外面自己：表に現れた自己の場合が多いように思われます。意識・無意識の層で考えると、質問紙は意識化された自分、ハンドテストは意識化されていない層も含むということで、少し異なると思われます。（山上）
自分の実際の経験での，「禁忌」を作っています。自験例で，図版の刺激が強く情動を動かしてしまったと感じる場面を経験しています。 それはいずれも暴力的行動の被害・加害の経験が直近にある人，でした。まさに「手を挙げる」「手を染める」といった表現があるように，手はダイレクトに暴力・攻撃の痛みを想起し，時に危険ではないか，と考えています。先生方のご経験で実施に注意される点などありましたらご教授いただければと思います。	被害・加害の直後に心理検査を実施することは，まず無いと思います。アセスメントが可能と判断される時期であれば，ハンドテストも他の心理検査（投映法）と同じように，実施可能だと思います。他の検査以上にハンドテストが対象者にとって脅威になることはないと，ワグナー先生はおっしゃっていました。手という刺激のために，他の検査以上に一部の患者さんにとっては脅威なのではないかと感じるかと思いますが，そうであれば既に検査者（手をもっていますね）そのものが，その患者さんにとっては脅威なのではないでしょうか？ 心理検査を脅威的な刺激にするかどうかは，検査者がその検査空間を治療的な空間にできているかどうかなのだと思っています（佐々木）。 ワグナー先生は、検査者・被験者の関係性が築かれない間に実施した方が良いと言われましたが、初対面でもどういうスタンスで検査を受けるかはそれぞれ異なります。検査者は被検者の構えを十分推し量った上で、検査をすること

が大事かなと思います。暴力被害・加害の当事者にとっては、手の絵は刺激的かもしれませんが、検査者・被検者間に信頼関係があれば、たとえ FEAR 反応が出たとしても、暴露療法に近いような効果が起きる場合があり、まずは、被検者がどういう気持ちで受けようとしているかを予測するようにしています。（山上）

ハンドテストの可能性や面白さを感じることが出来ました。ありがとうございました。

ありがとうございます。ハンドテストの可能性を広げていってください（佐々木）。
興味を持っていただきありがとうございます。（山上）

非常に広範囲のかかわりのある，発展性の高いものであると理解できました。自らの臨床とも結びつけて考えることができ，得るものがたくさんありました。感謝申し上げます。

こちらこそ，ありがとうございます。様々な臨床現場に合わせて，臨機応変に適用できると思います（佐々木）。
ご自身の臨床に役立つことを願っています。（山上）

日本ならではのハンド，母子関係のなかでのハンド，今の若者が生み出す文化のなかでのハンド等，一つ一つに焦点を当てて考えると，検査が立体的になることを，今日のシンポジウムで体験しました。
また，最後の質問者さんの発言で，自分はどんな手になりたいのか，が心に残りました。また研修会でのご指導どうぞよろしくお願いいたします。

本当に，今回のシンポジウムで，ハンドテストがさらに立体的になった気がします。新たな発展を期待したいです（佐々木）。
どんな手になりたいのかは、どんな自分になりたいのかという意味ですね。本当に手は顔以上に表情豊かではないかと思います。（山上）

興味深くお話聴かせていただきました。ハンドテストに興味を持ちました。またこの様な機会で学べたらと思います。

本研究会では，年１回のセミナーを企画しています。また，定期的な研究会も開催しています（本会の HP で紹介しています）ので，興味があればご検討ください（佐々木）。
是非これからもご参加ください。（山上）

自分に取って１０年ほど前は「ロールシャッハの簡易版」といった認識だったのですが，描画法の理解への援用や，外面自己・内面自己のお話しなどが，今の自分の臨床の方向性にとてもマッチしたものに感じられました。改めて勉強を続けたいと思います。ありがとうございました。

拙著「ハンドテストとロールシャッハ法：投映法バッテリーを学ぶ」にて，ワグナー先生の構造分析理論と，それを基にした佐々木の投影次元概念について紹介しています。ご関心があれば，手に取って頂ければと思います（佐々木）。
構造分析だけでなく、いろんな解釈・理解の仕方があります。経験を積むことで、自分にしっくりする理解の仕方に近づいていくのではないかと思います。（山上）